

# 日本語定形表現の形成におけるグラウンディング —事態認知と発話行為のインターフェース—

長谷部 陽一郎  
同志社大学(非)

## 0. はじめに

Ronald Langacker の認知文法(cognitive grammar)による英語の分析においては、モノ(thing)概念と関係(relation)概念という、二つの基本的な概念スキーマを言語表現として定形化するための認知プロセスとして、グラウンディング(grounding)という意味関数が重要な役割を担っていることが示されている。<sup>1</sup> Langacker によると、モノ概念は典型的に名詞句によって言語化され、冠詞や数量詞などの働きを受けてグラウンディングされる。関係概念は法助動詞や時制の接辞などの働きによってグラウンディングされ、定形節を形成する。それでは、このグラウンディングという意味関数は言語を問わず普遍的に実現する文法システムとして規定しうるものなのだろうか。それとも、それは生得的な認知能力を基盤とした認知機構でありつつも、言語によって個別的に異なる処理手順を伴って実現するものなのだろうか。本稿ではこの問題の核心へと迫る一つの試みとして、日本語の関係概念の定形化におけるグラウンディングを考察し、そのメカニズムに関する仮説を提案する。

## 1. Langacker によるグラウンドとグラウンディングの定義

まずは、グラウンディングと、それを実現するために不可欠な概念であるグラウンド(ground)という二つの概念に対して Langacker がどのような定義を与えているのかを確認しておくことにしよう。Langacker (1991)巻末の用語集では、これらの概念はそれぞれ次のように定義されている。

**ground** 発話事象、その参与者(話者と聞き手)、またそれを取り巻く直接的な環境。

**grounding** その適用がノミナル(nominal)あるいは定形節(finite clause)の形成における最終ステップとなる意味関数(semantic function)。特定のモノ概念や関係概念がノミナルあるいは定形節として機能するために必要な、グラウンドとの関係において相対的に定められる認知的位置を、基本的で epistemic な概念(名詞句に関してはその定性と不定性、節に関しては時制やモダリティ)に基づいて特定化する。<sup>2</sup> (Langacker 1991: 548-49)

これによると、グラウンドとは発話事象とそれにかかわる様々な概念を総称的に指す述語であり、グラウンディングとはグラウンドと何らかの命題との間に epistemic (認識様態的)な概念に基づく関係を結ぶ働きを持つ意味関数を意味する述語である。しかし、グラウンドという意味関数によってなされる処理がその基盤とする「epistemic な概念」とはいったいどのような概念なのだろうか。これを理解するには Langacker がエピステミック・プレディケーション(epistemic predication)と呼んでいる、ある特徴を共有した語彙によって構成される文法カテゴリーについて知ることが必要である。

認知文法ではモノ概念や関係概念にグラウンディングを与える機能を持つ特定の語彙をエピステミック・プレディケーションと呼んでいる。例えば、英語において、モノ概念のエピステミック・プレディケーションとして規定されているのは、*the* や *a* といった冠詞、*this* や *that* などの指示詞、それに一部の数量詞である。また、関係概念のエピステミック・プレディケーションとして規定されているのは、*would* や *may* などの法助動詞、それに *-ed* や *-s* など時制に關係する接辞である。(Langacker 1985)

ここで注意しなければならないのは、これらエピステミック・プレディケーションの意味内容は、それ以外の語の意味内容と、場合によっては重複することもあるということである。例えば、指示詞の *this* が持つ意味内容は形容詞の *near* のそ

れと類似している。また、過去の接辞-edの意味は、前置詞句 *in the past* の意味ときわめて近い。しかし、*this* や *-ed* といったエピステミック・プレディケーションとそれ以外の表現とが区別されるのは、意味内容それ自体のあり方によってではない。これらが区別されるのは、それぞれの表現の意味内容を実現する、より抽象的な構造のあり方の相違によってである。より詳しく言えば、エピステミック・プレディケーションとそれ以外の語彙との違いは、意味構造の最大叙述領域内にグラウンドという概念を要素として持っているかどうか、という点にある。エピステミック・プレディケーションである *this* や *-ed* が、「近接性」や「過去」の意味を持ちうるのは、その意味構造中に発話の絶対的基準点としてのグラウンドが存在し、それへの参照が行われるからである。それに対して、*near* や *in the past* といった表現が同じ「近接性」や「過去」の意味を持ちうるのは、先行する発話や文脈などから得られる、より客観的な命題的要素がこれらの表現の意味を支えるための基準点となるからである。その基準点が「たまたま」グラウンドの構成要素が指示するものと同一であるという可能性ももちろんあるが、そのような場合には、本来主観的なグラウンド要素を客観的な命題として取り出すという認知的プロセスが遂行されていると考えられる。

このようにグラウンドという意味の絶対的基準点とも言うべき主観的概念と深いかかわりを持つエピステミック・プレディケーションの助けを受けて遂行されるのがグラウンディングという意味関数である。<sup>3</sup> 必然的にそれは、意味内容という言語表現の命題的な側面よりもむしろ、発話事象の参与者に対して（多くの場合）無条件かつ非選択的に与えられた視点のあり方という主観的な側面に関係する概念となる。以下の議論においてはこのことがきわめて重要である。

## 2. 日本語におけるグラウンディング

日本語の述語表現には重層的な構造が存在する。このことは従来から盛んに論じられてきた。そして、その構造を実現するメカニズムを解明するには、純粋に形式的な統語構造としてそれを見るのではなく、発話を行う話者における主観的な見立てやモダリティのあり方を理論的に取り込む必要があるということもまた、多くの研究者たちによって主張されてきた。<sup>4</sup> 日本語の述語表現の構造は認知的・経験的な基盤を持っており、それは、経験された世界の反映としての事象命題とそれに対する認知主体（話者・聞き手）による主観的な解釈との関係が、部分的な類像性をもって言語形式として実現したメカニズムに他ならない。このような考え方は認知文法があらゆる言語表現の意味構造の基本として想定してきたことと一致する。それゆえ、認知文法における諸概念を利用して日本語の述語構造を分析することはきわめて自然で、かつ有益なことと思われる。このような認知文法の視点から日本語の述語表現を考察するにあたって、特に注目されるのは、動詞、形容詞、助動詞、助詞などからなる日本語述語表現の意味構造に対してグラウンドがどのように位置付けられるのか、そしてグラウンディングという意味関数がいかにして適用されるか、すなわち定形表現がいかにして形成されるか、という問題である。しかし、それは簡単な問題ではない。以下に論じるように、英語についての認知文法による分析によって得られたものが必ずしもそのまま並行的に日本語分析にも妥当するわけではないからである。

認知文法の視点から見た日本語と英語の構文的構造の違いに関して述べるために、まずは、認知文法が言語表現の構成においてきわめて重要なものとして想定している二つの文法カテゴリーについて、その本質を明らかにしておかねばならない。すなわちノミナルと定形節である。Langacker によると、ノミナルと定形節は意味関数の適用を受けることによって初めて完成する。これらは、概念タイプとしてのモノ概念と関係概念が談話の中で一回的な意味を持つための言語形式である。モノ概念と関係概念とは認知文法における最も基本的な概念カテゴリーであり、Langacker は次のように定義している。

thing ある概念的領域における下位領域 (Langacker 1991: 555)

relation 想起された要素間の相互的つながり (Langacker 1991: 552)

モノ概念の定義は非常に抽象的であるが、要は、何らかの対象が一つの概念的まとまりとしてとらえられたとき、概念化されたその対象は一種の「モノ」と考えられるということである。一方、関係概念は「要素間のつながり」ということであるが、要素(entity)という述語は、様々な内部的特徴を持つ概念を包括的に一般化したものを指す。そこで結局、関係概念とは、「モノ」あるいは「関係」を含む様々な内部構造を持つ複数の概念が認知的なつながりを持ったものということになる。ちなみに、Langacker はこれらの「モノ概念」と「関係概念」を把握する能力を、参照点能力などと共に、人間にとって

生得的に与えられた基本的認知能力としている(Langacker 1999b)。

以上のように定義されたモノ概念と関係概念が英語の言語表現形成のプロセスにおいて重要な役割を果たすことはLangacker によって十分に示されている。そして、モノ概念と関係概念を想起する能力が基本的認知能力であるならば、日本語話者の認知プロセスにおいても、当然これらの区別があることが予期されるが、実際、日本語でも英語同様、モノ概念は典型的に名詞句によって、関係概念は名詞句以外の様々な叙述詞(動詞、形容詞、副詞、助詞など)によって言語的実現を受けている。つまり、モノ概念と関係概念は英語と日本語において同様に理論的実在としての妥当性を有する概念だと言えるのである。

しかし、認知文法による日本語の分析における一つの大きな問題となるのは、名詞句がノミナルとなるためには、そして節が定形節となるためには、冠詞や数量詞、あるいは法助動詞や時制の接辞といった、いわゆるエピステミック・プレディケーションと呼ばれる表現によってグラウンディングされなければならないという規定をどのようにとらえるかということである。残念ながら日本語には英語のエピステミック・プレディケーションに完全に対応するような語彙は見当たらない。部分的には、英語のエピステミック・プレディケーションに対応する語彙が日本語にもある。しかし、日本語におけるそれらの語の使用は、英語のように厳密な規定に基づくものではなく、むしろ選択的である。例えば、モノ概念に関しては、英語の *the* や *a* に相当するものとして日本語にも「その」や「ある」といった表現がある。しかしこれらは必ずしも英語の冠詞と同様に用いられる語彙ではない。名詞句に接続することにより、その名詞句を談話における一回的意味を持った概念として言語的に提示することを可能にする語句であるという意味においては「その」や「ある」も英語のエピステミック・プレディケーションに近い側面を持っていると言えるが、これらの語彙の使用はノミナル表現の形成プロセスにおける手順の一つとして定められたものではない。「昨日、本を買った」とか「庭のチューリップはまだ咲いている」といった表現におけるモノ概念要素つまり名詞句には、英語の冠詞に相当するような明示的語句は付与されていないが、これらは全く自然な表現である。

日本語にエピステミック・プレディケーションの概念を持ち込むことが難しいのは、概念のノミナル化プロセスに関してだけではなく、定形節化のプロセスに関しても同様である。次の例(1)の三つの表現はいずれも基本的に同様の命題的意味を伝える表現として十分に容認可能な表現である。

- (1) a. 僕が欲しいのはお茶。  
b. 僕が欲しいのはお茶だ。  
c. 僕が欲しいのはお茶だよ。

実際の発話にいずれの表現を用いるかという選択それ自体は文法的に規定されているわけではない。それは談話という社会的事実へと関連付けられた自らの存在に対する認識を有した認知主体である話者の判断にゆだねられている。しかし、いずれにせよ、これらの表現は、それが意味と意図を伝える言語表現として機能する以上、それを発話する話者と、理解する聞き手の事象認知プロセスにおいてグラウンディングされなければならない。<sup>5</sup> そこで、問題は、これらの表現を構成する要素となる語で関係概念を想起させる働きを持つものうち、いずれの語がグラウンディングという意味関数の適用にかかわるエピステミック・プレディケーションであり、また、いずれの語がそうでないかということになる。

ただ、この問題に対する答えを求める前に、一つ確認しておかねばならないことがある。さきほど上の(1)の三つの例文が持つ「命題的意味」は変わらないと述べたが、そのことに関してである。「形式が異なれば必然的に何らかの形で意味の違いが生じる」ということは言語学において頻繁に語られる一種の定理であり、認知文法の公理系においてもそれはもちろん真である。認知文法的に言えば、「異なった言語表現は異なった意味構造によって実現する」と言うことができるだろう。そこで、「(1)の三つの文の意味は全く違わない」と言えば、それは誤謬である。しかし、認知文法においては、意味の構造は「主客の構造」としてとらえられ、そこでは広い意味での「意味」は、客観的場面における客体要素間の客観的關係によってもたらされる「命題的意味」と、自らを含めた発話事象のあらゆる直接的要素の総体として認知主体が想起する心的表象としてのグラウンドから客体的場面へと投げかけられる主観的關係という、質の異なった二種類の関係それぞれの「意味」から構成される。このような構造において、同一の命題的關係とグラウンドとの間に様々な主観的關係が結ばれることは可能である。それゆえ、(1)の三つの文に関して、たとえ客観的關係と主観的關係からなる全体的な意味が同じでなくとも、「命

題的意味」が等しいと述べることは可能なのである。

(1)の三つの文において客観的意味を担う命題的要素となるのは名詞句「僕」「お茶」および動詞「欲しい」である。「僕」と「お茶」という要素を参与体として含む一つのイベントが「欲しい」という動詞によって想起される。そこでは認知主体としての話者の意図や聞き手との関係といった主観的意味は言語的な形式を未だ与えられていない。概念構造として展開しているのは客観的場面上的の客体要素とそれらを結ぶ客観的關係だけである。この段階における概念の構造が持っている「命題的意味」に対し、様々な主観的關係が認知主体の動的な見立てによって与えられると同時に、それに適した形式が与えられることによって、定形節としての言語表現が生み出されるのである。<sup>6</sup>

さて、(1)の三つの文がいずれも定形の表現であるとすれば、これらの表現が定形表現となるために不可欠であるはずのグラウンディングという意味関数の適用は、いったい文中のどの語によってそのきっかけが与えられるのだろうか。これらの文におけるグラウンディングを担っているのは、係助詞の「は」なのだろうか、それとも肯定の判断を示す助動詞の「だ」なのだろうか、あるいはより発話行為的な色合いを持つ終助詞の「よ」なのだろうか。いずれの語も命題的意味内容の叙述に対して貢献するというよりもむしろ、認知主体による命題への主観的見立てや意図に関する表現として機能する語であり、その意味においてこれらはすべてエピステミック・プレディケーションとなる資格を持っていると言える。そこでまず考えられる選択肢は二つ。いずれかの文法カテゴリーに属する語のみがエピステミック・プレディケーションとして規定されるのか、それともいずれもが同時にそして同様にエピステミック・プレディケーションとしての機能を果たすのか、である。

まずは前者の可能性について考えてみよう。この場合「僕が欲しいのはお茶だよ」という文では、「は」「だ」「よ」はすべてエピステミック・プレディケーションであることになる。英語の定形節形成のためのグラウンディングにおいてはテンスに関する接辞の *-s* や *-ed* だけではなく、*would* や *may* などのモダリティに関する法助動詞もエピステミック・プレディケーションとなりえたのと同様に、日本語においても異なった様々な文法カテゴリーに属する語彙がエピステミック・プレディケーションとなるのである。そして、「僕が欲しいのはお茶」といったときには助詞「は」が、「僕が欲しいのはお茶だ」といったときには助詞「は」と助動詞「だ」の両方が、そして「僕が欲しいのはお茶だよ」といったときにはさらに終助詞の「よ」がそれらに加わって同時にそして同様にそれぞれがエピステミック・プレディケーションとして節の定形化に貢献することになるのである。しかし、少なくとも英語では定形節形成の最終ステップとなるグラウンディングを起動することは単一の語あるいは接辞に担わされており、複数の要素がそれに直接的にかかわるということはない。<sup>7</sup> 例えば、*He might be a bore* とは言っても、決して *He might is a bore* と言うことはない。それゆえ、日本語においてはそれが可能であると主張するためには、その理論的根拠を示す必要が生じる。

一方、後者の可能性をとるならば、上の例文では「は」「だ」「よ」のうちのいずれかのみがエピステミック・プレディケーションであり、その他はそうではないということになる。しかし、このように考えた場合、さらに難しい問題が生じる。仮に日本語では肯定判断の「だ」などの助動詞のみが関係概念をグラウンディングするためのエピステミック・プレディケーションとなりうると規定したならば、助動詞の含まれない文は定形表現にはなりえないということになる。しかし、これは正しくない。助動詞を含まない定形表現はいくらでもある。あるいは、関係概念の定形節化には「は」などの係助詞が不可欠だと規定したとしよう。すると今度は、係助詞のない文も定形表現となりえることを説明しなくてはならない。「よ」などの終助詞に関しても同様の理由で、他のカテゴリーに属する語を差し置いてそれだけを日本語のエピステミック・プレディケーションとして規定するわけにはいかない。

以上のような事情により、結局、単に英語の定形節形成にかかわるエピステミック・プレディケーションの完全な対応物を定義していくことによって日本語の定形表現形成におけるグラウンディングのメカニズムを規定することは不可能であると結論付けられる。

それでは、日本語の定形表現形成におけるグラウンディングのメカニズムはいかにして説明されるのであろうか。Langacker によると、あらゆる文の発話はグラウンディングのプロセスを経ることによって実現する。つまり、ある表現が定形節となることはとりもなおさずグラウンディング関数の呼び出しが実行されることを意味するのである。実はここに日本語におけるグラウンディングが実現するメカニズムの解明の鍵があると思われる。まずは、グラウンディングというものを、特定の言語形式がそれ自体に内在させる認知的機能として考えることから脱却しなければならない。そして概念としてのグラウンドが認知主体の心的領域においていかなる実在として規定されるかという問題にまでさかのぼって考えなければならない。次節では、グラウンディングという意味関数の本質についてあらためて考察する。

### 3. 意味関数としてのグラウンディングの本質

Langacker はグラウンドを「発話事象、その参与者（話者と聞き手）、およびそれを取り巻く直接的な環境」と定義したが、これは実はきわめて簡略化した表現だと言わざるを得ない。というのは、次のことがここでは全く示されていないからである。グラウンドは、他のあらゆる概念同様、心的な実在を持った要素である。だからこそ、それは文の命題的要素と何らかの関係を結ぶべく、意味構造内に特定の位置を占めることができる。心的な要素は外的世界における事物と何らかの対応関係を持つことが可能であるが、それ自体は決して対象となる事物と同一ではない。客観的場面内に投影された、グラウンド自体を含むあらゆるモノ概念や関係概念は、心的な表象であるゆえに様々な形式をもって言語的に表現されるのである。<sup>8</sup>

グラウンドという概念を、研究における一つの観察対象とすることには多くの問題が付きまとう。その実在としての性質について理論的に妥当で明瞭な理解を得ることがきわめて難しいからである。研究者は往々にして、グラウンドがあたかも話者や発話事象やその直接的環境そのものであるかのような錯覚に陥ってしまう。確かに心的表象としてのグラウンドは「発話事象、その参与者、およびそれを取り巻く直接的な環境」を意味するが、それは決して世界内の事象それ自体と同一ではない。この点をはっきりさせる必要がある。<sup>9</sup>

実際、このことは、一人称および二人称表現の意味の分析においてきわめて重要である。グラウンドを客観的場面内でプロファイル(profile)することによってわれわれは名詞や代名詞による一人称や二人称の表現を行うことができるが、これはその名詞や代名詞がシンボリックな関係を結ぶ対象が、外部世界に対応物を持つ「心的表象」であるために可能になるわけで、ここには他の様々な三人称表現と並行的な関係が存在している。われわれはあらゆる言語表現を音声あるいは文字形式と心的表象としての意味構造との間にシンボリックな関係を結ぶことにより、実現する。この点に関して、一人称および二人称表現も三人称表現も大きな違いはない。それにもかかわらず、一人称および二人称表現によって指示されるものを、意味構造という存在論的に主観的な実在のモードを持った構造ではなく、厳然たる外部世界内の存在物としての「話者」それ自体としてとらえてしまうと、必然的に認識における主客の関係は無限循環に陥ってしまうことになる（あるいは暗黙のうちにホムンクルス(homunculus)の存在を想定することになってしまう）。

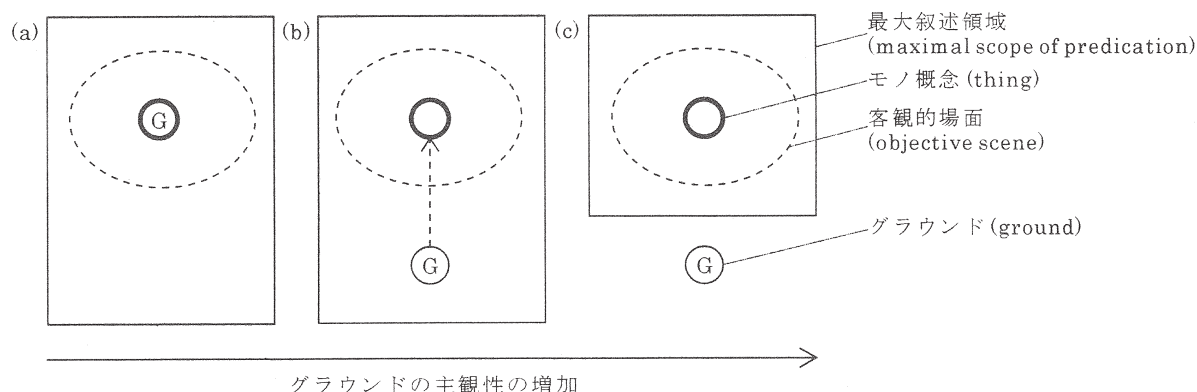


図 1

グラウンドが本質的に意味構造内に位置付けられる心的表象であるならば、他のあらゆる概念要素と同様、それは様々な認知的際立ちを持つ。Langacker (1985, 1991)は、グラウンドが意味構造においてとる位置の三つの可能性を提案しているが、そのそれぞれに、グラウンドに与えられた認知的際立ちのレベルが反映している (図 1 参照)。<sup>10</sup> まず、最も高い際立ちが与えられているとき、グラウンドは意味構造中の客観的場面と呼ばれる領域においてプロファイルを受ける。プロファイルを受けるということはとりもなおさずその意味内容が言語形式によって表現されるということであるから、このような場合に結果としてもたらされるのは例えば一人称代名詞をはじめとする、グラウンド要素を直接的に対象としてとらえた表現である (図 1a)。これはいわば、きわめて主観的な要素を客観的にとらえた表現と言えるだろう。逆に、与えられる際立

ちの度合いがきわめて低いとき、グラウンドは、客観的場面はおろか、最大叙述領域からも外れた位置を占めることになる。このような意味構造において想起されたグラウンドは、理論上、完全に主観的な要素となる（図 1c）。しかし、そのような意味構造は理論的に仮想された構造である。発話されるあらゆる表現の意味構造は必然的に最大叙述領域中にグラウンドを有する。そして客観的場面内においてプロファイルされた要素と、最大叙述領域の内側ではあるが客観的場面からは外れた位置を占めるグラウンド要素とが主観的關係（図中で縦の矢印によって示されている関係）を結び、結果的に、「ほどほどに」客観的な見立てを受けた要素を叙述する言語表現が形成されるのである（図 1b）。

このようなグラウンドの認知的際立ちの段階性に基づくモノ概念および関係概念の図式は、グラウンドおよびグラウンディングの概念の理解と理論的説明において大変有用なものであるが、注意しなければならないことが二点ある。一つはグラウンドに限らずあらゆる概念の認知的際立ちの度合いは、段階的であるというよりもむしろ無段階的な多様性を持つということである。上のそれぞれの図式の間には、無数の中間的構造が存在しうる。描かれた境界線は必ずしも問題を厳密にクラス分けするような類のものではなく、文字通り「境界線上」の事例を許容する類のものだということを理解しなければならない。そして、二つめは、ある表現が図式としていかなる構造を持つにせよ、それが意味と意図をもって発話されたならば、そしてそれがそのようなものとして聞き手により理解されたならば、そこにはいずれにせよ必然的にグラウンディングが実行されるということである。この二点めは重要な問題であり、詳細な説明が必要である。「発話されることによりいずれにせよグラウンディングされる」ということは、どういうことなのか。

グラウンドもまた、他のあらゆる概念同様、心的に想起される一つの表象に過ぎない。そして場合により様々な度合いの認知的際立ちを受ける。しかし、この概念が他の言語的概念と決定的に異なるのは、認知主体が談話という営みに従事している限り、そしてそこでもう一方の話者との間に社会的関係を結んでいる限り、命題的文脈を超えて常に概念構造中に存在しているということである。それはいかなるときにも、活性化され際立ちを与えられ意識の水面へと顔を出す可能性を持った概念である。あらゆる発話における言語表現は、それがいかに認識論的に客観的な叙述であるとしても、認知主体としての話者における存在論的に主観的な概念構造の外在化であることから逃れられない。そして聞き手もまた、発せられた音声あるいは記述により意味を再構築する過程における自らの主体的な営みと話者と自分との間に結ばれた談話事象の中での関係について、完全に無自覚であることはできない。談話の中で機能するあらゆる発話は、その発信者である話者の視点を絶対的な基準点にして、意味を織り込まれ、解読されるのである。この意味の織り込みと解読の作業自体は形式としての言語に内在する機能でもなく、また、織り込まれた概念自体とも別物である。それは話者と聞き手の意思と意図に基づく主体的な認知プロセスであり、その作業こそがグラウンディングなのである。この認知プロセスが遂行されることなしに言語が表現および伝達という機能を果たすことは不可能である。それゆえ、「発話される言語表現はいずれにせよグラウンディングされる」と言えるのである。<sup>11</sup>

グラウンディングという意味関数は、認知主体によって文字通り「主体的に」適用されるものであって、エピステミック・プレディケーションと呼ばれるある種の限られた語彙に内在的に備わった機能ではない。エピステミック・プレディケーション自体は、モノ概念あるいは関係概念を一つの概念的自律性を持ったまとまりとしてインスタンス化する認知プロセスにおいて大きな役割を果たす語彙カテゴリーであり、それは他のカテゴリーに属する語にはない、ある特定の意味構造を持った言語形式である。<sup>12</sup> しかし、モノ概念あるいは関係概念であるところの命題を、それが談話文脈の中で一回的な意味を持つよう、グラウンドとの相対的關係に基づいて心的に位置付けるという認知プロセスの遂行に関する判断と責任は、話者と聞き手という認知主体自身にある。要するに、エピステミック・プレディケーションはグラウンディングを認知主体に「促す」という役割を果たすものに過ぎず、グラウンディングそのものを内在的機能として持っているのではないということである。グラウンディングは本質として認知主体である話者と聞き手の側のきわめて心的で認知的な、なおかつ動的な、作業なのである。

ところで、Langacker はグラウンディングという概念を一種の *semantic function* と定義した。この *semantic function* という概念に対して本稿で「意味機能」ではなく、「意味関数」という訳語を与えているのは、以上のことがまさにその理由である。<sup>13</sup> グラウンディングは、談話・発話事象に参与するわれわれ認知主体によって主体的に——ただし多くの場合無意識的に——遂行される認知のプロセスである。それを客体化された他者としての事物・事象そのものや、それらに内在する性質・機能にすべて帰すことはできない。それは命題の意味内容の一部でもなく、ましてや音韻あるいは文字を伴った言語形式に内在するものでもない。「機能」という語が通常意味するのは主体から切り離された客体的要素に対して客観的

な観察を行うことによって確認される、特定領域内におけるその要素のあり方であり性質である。必然的に *semantic function* を「意味機能」として解釈することはグラウンディングを単なる特定の語彙群に客観的実在として内在する一つのプロパティとして片付けてしまうことになる。そして、そのような観点からグラウンディングという概念を見たならば、エピステミック・プレディケーションによるモノ概念のノミナル化や関係概念の定形節化の説明も、句や節がある特定の文法要素の働きを受けて、「統語的に」特別なステータスを獲得するメカニズムの説明に過ぎないことになる。確かに、グラウンディングをそのように一種の統語的システムととらえたとしても、発話された言語形式という事実についての一応の説明はできるかもしれない。しかし、それでは、命題的關係とグラウンドとの間に主観的關係を結ぶことによる言語表現への談話領域内での一回的な意味付けというグラウンディングの本質からは議論をはるかに遠ざけてしまうことになるだろう。

#### 4. 日本語定形表現形成の認知プロセス

ここで、日本語の定形表現形成に関する問題に立ち返ることにしよう。例(1)では「僕が欲しいのはお茶」「僕が欲しいのはお茶だ」「僕が欲しいのはお茶だよ」という表現が提示されたが、係助詞「は」、助動詞「だ」、終助詞「よ」という、エピステミック・プレディケーションとなる条件を備えた三種類の語彙のうちいずれかが唯一本当のエピステミック・プレディケーションであるのか、それともいずれもが同時にそして同様にエピステミック・プレディケーションとして機能しているのか、という問題について結論が出ていない。実は、この二つの選択肢はいずれも正解であり、またいずれも不正解と言える。以下、その理由について論じ、日本語において関係概念グラウンディングがいかに行われるかについて、最も妥当と思われる仮説を述べる。

まず、(1a)から(1c)までの例文中の係助詞「は」、助動詞「だ」、終助詞「よ」がすべてエピステミック・プレディケーションであると言えるのは、これらの語がいずれも、与えられる概念的卓立性の高さの度合いは様々ながら、概念構造において無条件に想起される心的表象としてのグラウンドを意味付与および解釈の参照点としているということがその理由である。係助詞の「は」は客観的場面内に展開される要素間の関係のあり方についての想定あるいは判断を行う視点としてのグラウンドの存在を、間接的な形で文全体の意味構造中に織り込む。<sup>14</sup> 助動詞「だ」は、それに先行する節においてなされた意味内容に関する陳述について、その判断の責任の所在がグラウンド要素としての話者自身にあることを明確に示す。そして終助詞「よ」は、客観的命題そのものと、それとの間に結ばれるグラウンド要素としての話者自身との主観的關係の全体を一つの概念としてパッケージ化した上で、グラウンドというそれ自体に複雑な内部構造を持った概念領域の領域内で相対的に位置付けられる話者と聞き手の関係に対する認識とそれに基づく話者の発話意図のあり方に言語形式を与える。いずれの語も、叙述領域中に展開される関係概念に対して絶対的意味基準としてのグラウンドとのつながりを与えるために認知主体によるグラウンディングを促す働きを持つ語であり、エピステミック・プレディケーションと見なすことができる。

しかしながら、これらのエピステミック・プレディケーションが一つの定形節の中で共起するような場合に、いずれもが同時にそして同様に認知主体によるグラウンディングの遂行をトリガーすると考えることには誤謬がある。既に見た通り、英語では定形節形成の最終ステップとしてのグラウンドが同時に複数の呼び出しを受けるということはない。*He might be a bore* とは言えても、*He might is a bore* とは言えないのである。この表現の定形節形成においては、*he*によって指示される人物への評価に関する命題についての主観的な判断を提示する働きを担っている *might* によってグラウンディング関数の呼び出しがなされている。いわばこの語によって想起された関係が文構造における最高次の関係概念となり、発話行為とのインターフェイスとしての役割を果たすわけである。その際に、より下位の関係概念表現、すなわち *be* は、より上位の構造の一構成要素に徹し、それ自体に対するグラウンディングを受けない。

(1c)の「僕が欲しいのはお茶だよ」のような表現では、三つの異なる文法的カテゴリーに属する語がエピステミック・プレディケーションとして同時にグラウンディングの呼び出しを行っているかのように見える。確かにこれら三つの語のそれぞれが認知主体の心的領域に展開する意味構造は、グラウンディングという意味関数の働きなしには理解することができないものであり、発話のプロセスのある時点でそれぞれの語が促すグラウンディングの遂行がなされることは間違いない。しかし、それは「同時」にそして「同様」におこるものではない。この点はきわめて重要である。以前から論じられてきた日本語の「重層的構造」もここに認知的背景を持つ。

日本語における関係概念へのグラウンディングの呼び出しを、認知主体が言語化の対象となる命題に対してある種

的自律性を認めるときに随時可能となるものと規定すれば、日本語表現の構造の重層性は連続的グラウンディングの結果として説明できる。そして、結局、日本語における複数のエピステミック・プレディケーションが同時に複数のグラウンディングを呼び出しているように見える表現の意味構造においては、実際には、「同時に」複数のグラウンディングがなされているのではなく、概念的自律性を持った、より小規模な概念から、より複雑な内部構造を持った大規模な概念へ、という表現構造の発展に伴う連続的なグラウンディングがなされているのだと考えられる。

小規模な概念へのグラウンディング関数の戻り値として得られた定形表現は、グラウンディングという意味関数の適用の過程において必然的に概念的自律性を得るために、ある種のモノ的性質を帯びることが許され、その結果としてさらに高次の関係概念の参与体要素となることができる。そしてこの高次の関係概念もまた同様にグラウンディングの過程を経て、さらに高次の関係概念への関係要素となる。このようにして、小規模な構造から、より大規模な構造へとグラウンディングを媒介とすることによって表現が発展していくのである。

ただしこの連続的構造も言語表現による意味伝達という本来の目的の達成のためには、あるレベルで閉じられなければならない。それは認識された事態が認知主体の意思と意図に基づいて言語形式による記号化を受け、最終的に談話という外部世界的事実としての発話行為となって現象するレベルである。日本語においてはこのレベルのグラウンディングの明示的な呼び出しは、終助詞という語彙カテゴリーによってなされる。ただしこのレベルのグラウンディングには必ずそのような明示的な形式が与えられるわけではない。終助詞のない(1a)や(1b)の文でも、実際的な文脈を伴った実際の談話において発話されたならば、このレベルの認知プロセスが暗黙のうちに遂行される。あらゆる表現は、それが談話の中で適切な意味を持つものとして話者によって発話され、聞き手によって適切に理解されるために、明示的にであれ、あるいは非明示的にであれ、事態認知と発話行為のインターフェイスとなるこのレベルのグラウンディングを必要とするのである。

さて、以上のことを踏まえて、(1)の三つの例文をもう一度確認してみよう。まず、(1a)の「僕が欲しいのはお茶」という表現であるが、この表現には動詞句と呼べるものがない。しかし、そのためたとえ定形節と呼ぶことが不可能であっても、この表現は談話の中で十分にその機能を果たし、自然な定形表現として容認されえる。それは、他でもない、認知主体による動的な認知プロセスとしてのグラウンディングが行われるからである。

(1b)は「僕が欲しいのはお茶だ」という表現である。「だ」という終助詞は、その働きとして、認知主体に関係命題をグラウンディングすることを促す。この認知プロセスの結果として発話されるのが定形表現としての(1b)である。ここでは、係助詞「は」の働きのために既にグラウンディングされている「僕が欲しいのはお茶」という関係命題が、助動詞「だ」の働きによって、意味構造の中で客体としてとらえられ、話者の断定的判断をその意味として持つ主観的な「縦」の関係における客観的場面側の要素としての役割を果たしている。

(1c)の「僕が欲しいのはお茶だよ」には、「は」と「だ」に加えて、終助詞の「よ」が加えられている。これによって、ここではさらに高次のグラウンディングへの要請が認知主体に対してなされることになる。このレベルのグラウンディングにおいては、話者が談話という他者との社会的な関係の中で成立する事実の形成にかかわる参与者である自らの存在を心的表象として再帰的にとらえていること、そして、談話領域の中で自分自身が発話を遂行していることに対する高い意識が存在していること、この二つの事実に対する言語的概念化が達成される。このような表現の発話は、それ自体、「発語内行為(illocutionary act)」の遂行であると言える。

以上のように、日本語においては、認識された関係概念に対して段階的にグラウンディングが繰り返された結果として定形表現が形成される。この段階的なグラウンディングの連続における最初のステップ、すなわち最も小規模な概念の定形化から、最後尾のレベル、すなわち最も大規模な概念の定形化、にかけての道筋は、客観的場面に展開された要素と要素との客観的関係をそれ自体で一つの客体概念としてとらえ、グラウンドというもう一つの概念との間に主観的関係を結ばせるといふ認知プロセスの繰り返しである。このように関係概念をそれ自体で一つの客体としてとらえることは、複合構造としての関係概念を、その内部的複雑性を表面的に隠蔽することによってオブジェクト化することに他ならない。そのようにオブジェクト化されることによって単一要素として扱われることが可能になった関係概念はさらに高次の認知プロセスにおける参与体として機能できるわけである。ここに、日本語の文構造が重層性を持つことの認知的背景が存在する。

このような複雑さの隠蔽、オブジェクト化あるいはカプセル化は、実は Langacker の認知文法による英語の分析においても頻繁に取り上げられてきたある問題と本質的には同一である。すなわちそれは関係概念の名詞化(モノ化)に代表される概念の具象化(conceptual reification)の問題である。英語における定形節の構造は基本的にモノ概念と関係概念の具象化

の繰り返しによるものである。モノ概念のグラウンディングは典型的に名詞句に対して付与される冠詞や数量詞などがその呼び出しを認知主体に促すことにより達成され、関係概念はそのようにグラウンディングされたモノ概念を参与体要素としてとることにより具体化する。そして、より複雑で大規模な概念構造の構築のためには、それ自体に複数の構成要素を含んだ関係概念もモノとしての見立てを受け、グラウンディングされ、具象化されるのである。英語の節形成におけるこのような構造は、日本語の定形表現形成における重層的グラウンディングと何らその本質において異なるものではない。Langacker (1999b)が論じている通り、概念のグループ化および具象化は人間にとって生得的に備わった基本的認知能力の一つである。とすれば、表面的には(英語との対比において)日本語の特徴と思われる定形表現形成の重層構造も、それを可能にしているより基本的なメカニズムは英語の文構造におけるそれと同一であり、認知文法が想定する生得的な基本的認知能力に基づいた概念形成のパターンの一つをたどるものとしてとらえられるだろう。

## 5. 結語

本稿では、重層的であるとされる日本語の定形表現の意味構造について、Langacker の認知文法において規定されているグラウンドとグラウンディングという二つの概念を手がかりに、そして同時にこれらの概念の定義を再吟味しつつ、考察した。中心的な主張は以下の二点である。

グラウンディングという意味関数それ自体は、エピステミック・プレディケーションと呼ばれる特定の語彙に内在する機能ではない。それは話者と聞き手という認知主体が、典型的にはエピステミック・プレディケーションにより心的領域に展開された意味構造によりきっかけを与えられることにより、能動的に、命題的客概念とグラウンドとの間に主観的關係を結ぶその認知プロセスに他ならない。

日本語の定形表現の意味構造形成は、命題となる概念の自律性に基づき連続的にグラウンディングが繰り返されることによってなされる。たとえ関係概念として内部的な複雑さを持った概念であっても、それに対してグラウンディングが遂行されることによってインスタンス化しさえすれば、一つのオブジェクトとして具象化し、単一の客体としての扱いを受けることが可能になる。それゆえ、日本語のように係助詞、助動詞、終助詞など、関係概念に関する epistemic 性を持った語彙によるグラウンディング関数の呼び出しが連続して行われる言語においても、モノ概念と関係概念という認知文法の規定する二つの概念スキーマを基本とする意味構造の整合性が保たれながら様々な規模の定形表現の構築が行われていると言える。

## 注

<sup>1</sup> Langacker (1985, 1990, 1991)を参照。

<sup>2</sup> ここでは semantic function という述語に、「意味機能」ではなく、「意味関数」という訳語を与えた。この理由は後に述べる。

<sup>3</sup> 「グラウンド」という名詞は、それと関連した認知プロセスの遂行を表す場合には動詞としても用いられる。「グラウンディング」とはそのような動詞としてのグラウンドから派生した語であるが、本稿では名詞としてのグラウンドと動詞としてのグラウンドとの区別を明確にするために、動詞としてのグラウンドを意味するときにも「グラウンディングする」という表現を用いることにする。

<sup>4</sup> 日本語の重層的構造についての比較的新しい研究には澤田(1993)、中右(1994)などがある。

<sup>5</sup> このことについては、3節で詳しく述べる。

<sup>6</sup> 客観的關係の参与体要素となる名詞句はノミナルであることが求められる。それゆえ例文(1)の名詞句「僕」「お茶」は、動詞「欲しい」の想起する関係に参与する時点で既にグラウンディングされていると考えられる。ところが、一度グラウンディングされた概念は既にある程度の客観性を侵食されているわけであるから、これらの名詞句が想起する概念を客観的な命題的要素と見なすのは、一見問題があるように思える。しかし、自らの主観的見立てに基づいてグラウンドしたモノ概念の主観的性質を背景化させ、それがあたかも純粋な客観的要素であるかのように見立てを行うことは、基本的認知能力に基づいて自然になされうることである。それゆえ、より高次の認知プロセスである関係概念の定形節化において、その参与体要素となるノミナルのそれぞれを客観的な命題的概念として見なすことに理論的問題はないと言える。

<sup>7</sup> ここでは定形節の最終ステップとしてのグラウンディングを論じているのであるから、グラウンディングされる関係命題の参与体要素の一つとして既に具象化(reification)された that 節の内部におけるグラウンディングなどについては論外である。

<sup>8</sup> ここで「表象」、あるいは「心的表象」という述語が意味するのは概念の絵画的なイメージではなく、また、Lakoff and Johnson (1999)が第一世代の認知科学における誤りとして取り上げた「意味の反映論」に基づくものでもない。心的表象(representation)という述語が招く誤解とそれに対する認知文法の見解については Langacker (1997)を参照。

<sup>9</sup> 心的表象としてのグラウンドの実在性については長谷部(2001)を参照。

<sup>10</sup> 図1はモノ概念の意味構造におけるグラウンドの概念的際立ちのスケールを示した図であるが、同様に関係概念の意味構造におけるグラウンドの際立ちのスケールを図式化することももちろん可能である。

<sup>11</sup> このように考えると、エピステミック・プレディケーションが持っているグラウンディングの呼び出しを喚起するという機能は冗長なものであり、定形節の成立には不必要となるのではないか、という疑問が生じるかもしれない。英語の時制接辞や法助動詞をわざわざエピステミック・プレディケーションと呼ぶ必然性が見当たらなくなるのである。実際、ある意味においてこの疑問は的を射たものと言える。意味内容的な必然性が特になくともかわらず、それがなければ定形節として成立しないような条件を文法が設定しているという例が確かに存在するからである。例えば、三人称単数の主語に現在時制の動詞を述語として与える場合には動詞に接尾辞の *s* を接続させる必要があることは、主語が複数であればそれが不必要であることを考えれば、冗長であると言えるだろう。しかし、時制接辞であれ、法助動詞であれ、すべてのエピステミック・プレディケーションは、たとえそれが命題的意味に関しては貢献の少ない、冗長的なものであったとしても、絶対的な基準としてのグラウンドと命題との相対的關係付けを明示的に促すという機能を「主観的意味」として持っているわけであり、そのような語彙の側の条件と、「あらゆる発話はグラウンディングされる」という談話的あるいは発話行為的な条件とが重なり合って英語における関係概念の定形節化のシステムが機能していると考えれば、そこにはむしろ合理性さえ感じられる。

<sup>12</sup> ここで用いている「インスタンス」という述語は、命題レベルにおける *type* と *instance* の区別、すなわち「総称」と「個称」の区別とは関係ない(Langacker 1991: 67)。それは、想起された命題をシンボライズする言語形式が談話の個別的な文脈の中で一回的な意味を担い発話されたもの、として理解されたい。ちなみに Langacker によれば、「グラウンディングは(対象の)インスタンス化を前提とする」(Langacker 1991: 96)。

<sup>13</sup> 「関数」という述語に認知文法的理念との不和を感じる向きもあるかもしれない。この語が、認知文法が否定する生成文法的モジュールのようなイメージを想起させるからだ。しかし、グラウンディングという意味関数は決して命題的知識の集合としてのモジュールでもなく、計算的処理のためのモジュールでもない。それは言語能力を含む認知能力全般のあり方に基づくより基本的・身体的・前言語的システムである。それゆえ生成文法などの理論において想定されているような命題的言語処理関数と同列に論じられるべきものではなく、そのような文脈において語られる「モジュール」とは全く質の異なるものである。

<sup>14</sup> 係助詞の「は」がエピステミック・プレディケーションであるという主張の理論的根拠については長谷部(2000)を参照。

## 参考文献

- Lakoff, George and Mark Johnson. 1999. *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.
- Langacker, Ronald W. 1985. "Observations and speculations on subjectivity." In Ronald W. Langacker and John Haiman, eds., *Iconicity and Syntax*, 109-150. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar: Volume 2 Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1997. "The contextual basis of cognitive semantics." In Jan Nuyts, ed., *Language and Conceptualization*, 229-252. Cambridge: Cambridge University Press.
- Langacker, Ronald W. 1999a. *Grammar and Conceptualization*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1999b. "Assessing the cognitive linguistic enterprise." In Ronald W. Langacker, Theo Janssen, and Gisela Redeker, eds., *Cognitive Linguistics: Foundations, Scope and Methodology*, 13-60. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 長谷部陽一郎. 2000. 「～は～です／～は～が～です構文に関する一試案」 *KLS* 20, 207-217. 関西言語学会.
- 長谷部陽一郎. 2001. 「言語における主体の概念と認知文法」 *Core* 30, 33-61. 同志社大学英文学会.
- 中右実. 1994. 『認知意味論の原理』東京: 大修館書店.
- 澤田治美. 1993. 『視点と主観性: 日英語助動詞の分析』東京: ひつじ書房.

<abstract>

## Grounding of Finite Clauses in Japanese

Yoichiro Hasebe  
Doshisha University

Grounding is a semantic function that is activated as the final step in the construction of nominals and finite clauses. In English, as presented by Ronald Langacker, grounding develops thing concepts into nominals and relational concepts into finite clauses with the well-systematized grammatical system. But it is not clear if this grounding mechanism assumed in the study of the grammar of English is also considered suitable for the grammar of Japanese. Though there are some subjectively oriented words in Japanese that can be seen as the counterparts of the grounding (epistemic) predications in English, they are different in many respects from the English grounding predications.

This paper presents how relational concepts are grounded and developed into finite clauses in Japanese and shows what differences there are between grounding in English and Japanese. At the same time, it is argued that Langacker has not yet explained the concepts of ground and grounding enough in previous works and that these concepts need more detailed study and clearer definition. As one of such attempts, this paper emphasizes the importance of the fact that grounding is a semantic function that the speaker or hearer as the subject of cognition activates dynamically in order to make linguistic expressions reified and instantiated. Grounding is not a static function inherently given to the particular words themselves that is activated automatically and mechanically regardless of the subject's intentionality.

Based upon the theory of grounding, the formation of finite expressions in Japanese is explained in terms of the conceptual structure that cognitive grammar assumes as the basis for the meaning of language. It is presented that in Japanese there are, in fact, some classes of epistemic predications, and, more importantly, that Japanese allows for multiple applications of grounding to take place and to instantiate relational concepts of different levels of subjectivity within a single clause. As an explanation to this phenomenon, I argue that in Japanese, the grounding function can reify a relational concept and make it a thing-like object (or *encapsulate* it) while preserving its relational status. Consequently, the relational concept that is made finite by the previous grounding is able to be an argument of another higher order relation. Interestingly, this is compared to the fact that English relational concepts can be nominalized and the resultant thing concepts are able to be component elements of a higher order relation.